



さざなみ国語教室
 第453号 2019年12月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

「十二年間 授業研究会を

続けてきて

百崎 正俊

十一月一日、私の勤務している寝屋川市立東小学校の国語科授業研究会に、吉永先生が講演会講師として来ていただきました。数年前からは非吉永先生にと思っておりましたが、日程が合わず今年ようやく念願かなって先生に来ていただけることとなりました。

先生には、本校の一六六年の全学年の授業を参観いただき、講演会では、全クラスの様子を講評していただきました。一クラス五十分程度の本当に短い時間しか参観されていなのに、各クラスの様子を的確につかみ授業を見抜く「教育者」としての吉永先生の「眼力」の素晴らしさに圧倒されました。

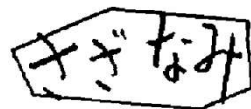
一年生では、机の整頓や基礎基本。二年生では、詩での音読やリズム感の大切さ。三年生では、構造的な板書や根拠も持つこと。四年生では、国語の授業がそのまま学級経営になること。五年生では「キーワード」を見つける目。六年生では、子どもによる授業のまとめや振り返り、確かな理解が豊かな表現につながる等、たくさんのご示唆をいただきました。

又、講演会には、遠く青森・静岡・宮崎県からも先生方が参加されました。アンケートでも、吉永先生のお話が大変よかったとの感想がたくさん書かれており、特に「国語力は人間力」「丁寧」とい

う言葉の大切さがよくわかったとの感想が多数寄せられました。本校は寝屋川市にある小さな一公立小学校です。授業研究会も、十二年前、私が教頭だった時、先代の校長先生が当時大変だった学校を「授業で立て直す」という決意で第一回研究会を立ち上げられました。私が先代校長の思いを引き継ぎ、(継続は力なり)ということとこれまで自主的に公開してきました。

本校も若年教員が増え、毎年十人近い教職員の異動もあります。教員の顔ぶれも変わる中、「チーム東小」として学校全体が同じ方向を向き、私自身も若い先生方と一緒に教材解釈をし、授業を全クラス見に行き、共に反省し喜びを共有しながら、地道に研究を続けてきました。今思うに、研究授業を通して、若い先生方の授業力が伸び、子どもの姿が変わっていくことが校長としての何よりの(喜び)となりました。又、そんな先生方や子ども達に出会えたこと、そして、今回吉永先生にご指導いただけたことに心から感謝したいと思っております。

(寝屋川市立東小学校校長)



▼令和元年十二月八日の新聞のトップ記事は「日本『読解力』急落15位」「長文読め書き減要因か」(読売新聞)であった。経済協力開発機構(OECD)実施した国際学力到達度

調査(PISA)の結果、前回の8位から大きく順序を下げたという報道である。「文部科学省はSNSによる短文のやりとりが増加で、長文の読み書きをする機会が減少をしたことが一因」という解説が付け加わっている▼国語学力については、すでに「教科書が読めない中学生」が話題になり、「五分間の時間をあげます」と指示で活動が始まるというタイマーに授業の主役を譲る実態。折々に「子どもが国語を学ぶ」という授業の先にあるものがはつきりしないという課題を持っているので、今回の「読解力」については深刻に受け止めている。特に、「ゆとり」が話題となっていた頃と違って「平成から令和時代」の中で、教育に対する考え方や指導技術、あるいは、学校現場の環境の変化と無関係ではない▼「読解力の問題では、今回はウェブサイトや投稿などインターネットの複数の情報の質や信憑性を評価する内容なども加えられていた」という記事もあった。が、それ以上に、国語科授業の進め方や学習活動にも課題があると思うことが多い。改めて「国語力は人間力」の視点で考えてみたい。

(吉永幸司)

長く書ける

長く話せる

西村 嘉人

本紙の六月号に「新しい出会い 新しいチャレンジ」のタイトルで、一人学級の担任をしていることを書いた。一日のふり返りを書く活動を続けながら、言葉の成長を見つめている、という内容であった。その六ヶ月後の話である。

十一月半ばの舞台芸術鑑賞会の感想文である。

一、二時間目の時、今日はげきを見ました。「銀河鉄道の夜」を見ました。すごかったところは、一生けんめいダンスとかセリフをまちがえないようにしていたのがすごかったです。出ていた人はジヨバンニとカムパネルラといういろいろな人が出ていました。ソアレスゆのちゃんも出てくれました。ゆのちゃんだとすぐに見つけられました。私が一番いいなあと思ったところは、友だちが海にすんじやって、カムパネルラが海の中へ入って、友だちはぶじに助かったんだけれど、カムパネルラが海の中にすんじやって、そこが一番じーっと見ていました。(後略)

まだまだ続くのだが、約六百文字の感想を十五分足らずで書き上げた。短い時間で、ずいぶん長い

感想文が書けたことをまず誉めた。しかし、それ以上に「一番いいなあと思ったところは、(略)そこがじっと見ていました。」と自分が感動した場面をじっと見つめていた自分に気づいて、文章に表したことが最も誉めたいことであつた。

出来事を辿って書くことはこれまでからできていて、作文を書いている横で「それで」「それで」とタイミングよく声をかけるようになっていた。しかし、「そのときどんな気持ちだった？」と問の手を入れると、鉛筆が止まってしまふことが殆どだつた。作文のたびに「それで」「どんな気持ちだった」を言い続け、少しずつ書けるようになってきたのである。

毎朝の活動「昨日の話」でも、「それで」「それで」「どんな気持ち？」を言い続けた。

職員室へ「朝の挨拶」に行く時間に先生方と交わす言葉数もずいぶん増えた。校長先生とは長い日には十分間ほど話をして出てくる。

「校長先生と盛り上がったましたね。どんな話でしたか。」と声をかけると、

「始めはねえ、・・・」と話してくれる。

今、彼女のポイントは「長く」である。長く書く、長く話すことが心地よいのだそうだ。みんながここにこしてくるから。

(彦根市立稲枝西小学校)

「複合単元の授業づくり」

三上 昌男

説明文「和の文化を受けつぐ」と和菓子と「和の文化」(東書五年)を主教材に読み、和の文化について調べたことを説明する会を開くことを目的とした学習の授業研究会に参加する機会があつた。

「読むこと」と「話すこと・聞くこと」とを複合させた単元を構想する場合、単に二つの学習をつなげて行うだけではなく、それぞれの指導のねらいを効果的に実現できるように工夫することが大切である。

学習のゴールとしての説明会を行うためには、主教材を通して、和の文化についての筆者の考えと説明の仕方を読み取り、和の文化に関する本や資料を調べて伝えたいことをまとめる学習につないでいく必要がある。

授業者は、今回の学習で児童の読む目的を明確にしようと、導入段階に和の文化を説明する学習の成果モデルを示し、学習のゴールイメージを持たせようとされている。伝える相手として、「くらしの中の和と洋」(東書四年)を同時期に学習している四年生を対象に設定されている。

また、教室に「和の文化の本コーナー」を設け、和の文化への興味関心を高めるとともに、並行読書に活用できる副教材を準備しよ

うとされている。

ここまでの指導の工夫は、児童が学習の見通しを持ち、主体的な学びを実現できるように配慮されたものである。第一次における学習では、児童が学習の目的と見通しを持てるかが重要である。

そこで気になるのは、和の文化についての児童の意識である。授業者は、単元の一時間目、「和の文化について知っていることを話し合う」ことを導入で展開されている。和菓子・和太鼓・和紙など、日本の伝統的な文化に関する言葉がいくつか発表されたようである。そして、児童は、授業者の和の文化についての説明を見聞きしている。

指導の手順は確かであるが、児童の学習への意欲喚起はどうであったのだろうか。和の文化の説明会を開くことへの目的意識は持っていたのだろうか。導入前の耕しが必要であったのではないだろうか。

私が参観させていただいた授業では、主教材を読み、和菓子を支える人々やそれを伝える説明の工夫を読み取ることに取り組まれていた。児童は、本時の課題にしっかりと取り組んでいたのだが、自分たちが開く説明会に向かっている勢いをどのように育てるべきかを考えながら参観していた。

新学習指導要領における、「主体的に学習に取り組む態度」の評価では、学習改善に向かう児童の意志的な側面を捉えて評価することが求められている。

(滋賀県総合教育センター)

逆上がりの言葉
弓削 裕之

2年生の体育の課題に逆上がりがある。放課後遊びの時間に、一人の女の子が何度も逆上がりの練習をしていたので、応援をしにグラウンドへ行った。いろいろなサポートをしたが、もう一息のところ。また明日かな...と思った時、同じクラスの友だちが隣の鉄棒にやって来た。「練習してるん？こうするんやで」と、その子はくると逆上がりをして見せた。次の瞬間、思い切り地面を蹴り上げた女の子の逆上がりが見事成功した。

別の日、休み時間に鉄棒のところへ行くと、逆上がりの練習を手伝っている子を見かけた。「こようだよ：こよう」と身振り手振りで教えていたが、相手に上手く伝わらず困っている様子だった。どうやら、曲がっている足が気になるようだった。腕を組み、時間をかけて悩んだ末に、その子は「カッブに挿してあるストローのように」とアドバイスをした。すると、友だちは「ああ〜」とイメージをつかむことができた様子で、前よりも空に向かって足を伸ばすことができていた。その姿は、確かにストローのように見えた。

「友だちパワー」のすごさと、子どもが選ぶ言葉の素敵さに感動した私は、「逆上がりアドバイスカード」を作った。カードには、アドバイスを(逆上がりのコツ、こういうことに気をつけたらわたしはできた、など)と、●メッセ

ージ(はげましのことばなど)の二項目を設けた。自由に取れるように置いておくと、鉄棒が大好きな子や、最近逆上がりができるようになった子たちが「よしきた」とすぐに書いてくれた。

○キランの首みたいに足をぴんとのばせばいいと思います
●さか上がりをがんばってください。

○おなかにぼうをくつつけてあたまの上にボールがあると
思っただけでボールをけるようにして回ればいいと思います
●がんばればさか上がりができるよ。

○てつぼうとおなかをはなさず、足とてつぼうがつくとやりやすかったです。
●今言ったことばを気にした人は、だいたいの人は、さか上がりマスターだ！
○一ばん大切なのは、じしんをもつことです！
●わたしもさいしよはできませんでしたが、れんしゅうしたらできたので、れんしゅうすればかならずできます！じしんをもつてね！

チャイムが鳴ると、寒空の中、今日も鉄棒に向かう子どもたちがいる。練習前、教室に掲示してあるアドバイスカードに目を通す姿が、友だちの言葉が、励む彼らの背中を押してくれている。

(京都女子大附属小学校)

鳥獣戯画を読む
鎌屋 正雄

本教材は光村図書(6年生)の説明文である。大変魅力的な文章で、書き出しも会話文から始まるなど、読者をひきつける表現技法にあふれている。一方で、「人類の宝」と言い切る高畑勲の膨大な知識と経験に対して、子どもたちの生活経験や知識が追いついておらず、批判的に読むことが難しい。一学期に取り組んだ「笑うから楽しい/時計の時間と心の時間」においても、批判的に読む方向ではなく、著者の主張とその根拠となる事例の良さを見つけていくという形で学習を進めた。

今年の校内研修では「自分の言葉で伝える力の育成」というテーマで取り組んでいる。「鳥獣戯画」導入部では語り掛けで始まるころや体言止めでリズムカルに論を進めるところがあり、その真似をしなが、書く表現方法を新しく取得させたいと考えた。読み取りは、「著者が鳥獣戯画の良さを書いているところに線を引く」という活動から始めた。高畑勲さんと同じように「人類の宝だ」と感じた子。「古さと守り続けてきたことだけで人類の宝だ」と感じた子。「時々入ってくる問いかけの文章がいい」「パツとページをめくってみてください。」といった動きを見せるのが面白い」と、内容について線を引く子が多く、導入部の表現技法に言及す

る子がいなかった。読み取りとしては、十分に筆者の意図をとらえられたと判断したので、導入部の表現技法に注目し、書くプリントを用意した。手引きにもある活動で「笑うから楽しい」の書き出しと「鳥獣戯画」を読むの書き出しを見比べて、「会話文で始まっていること」「体言止めでリズムよく進んでいること」「実況中継のように進んでいること」など、気づいたことをまとめ、教材文にある2枚目の挿絵「三匹の応援蛙」の解説文を書くというものである。

「ドン！ 勢いよく投げられた兎に驚く。笑っている兎。あまりに急なことに応援蛙らは目を見開いて飛び上がった。」

「ひるんだ所を蛙がまたもや「蛙がけ」。投げとばされた兎は思わず降参。それを見た蛙は大笑い。「ゲロロツ」「ゲロロツ」「ゲロロツ」

「いけいけいけ！」三匹の応援蛙たちが相撲を取っている蛙と兎を見ていました。兎が気を抜いた所に気づき、兎を投げとばす蛙。「ゲロロツ！」応援蛙の喜びの声。この試合に勝利したのは「」。など、語り掛けが始まっているところや体言止めでリズムカルに表現している子もいる一方で、体言止めの表現はまだ子どもたち自身が使うにはハードルが高いようである、新しい表現技法を使いこなすというところまではいかなかったが、「こんな説明文もあるのだ」「こんな伝え方もあるのだ」と気づくことができた学習となった。

(草津市立矢倉小学校)

三十六年ぶりの
わらわりのなかの神様

伊庭 郁夫

三十六年前の「わらわりのなかの神様」の授業を未だに覚えてい
る。転動した小学校で「同教授研
究」の授業をすることになり、教材研
究を学びに学外でも教えをいた
いた。おかげで、子どもたちが意
欲的に学習に取り組み手ごたえを
感じた。ある日、母に連れられ
子どもが教室に姿を現わした。
「どうしても勉強したいと言いま
すので、熱があるのですが連れて
きました」
その光景は、永い年月が経って
も忘れられない。

さて、ご縁があつて高島市内の
小学校で「人権研」(人権教育に
おける授業と教材に関する研究集
会)に関わる機会を得た。担任は、
五年生。どの単元を授業するかか
ら始まった。内容も「人権教育」
にふさわしく、また私がかつて授
業したこともあることから「わら
わりのなかの神様」を扱うことにな
った。
急いで、当時の資料を探し当て
た。担任していた当時「大造じいさ
んとガン」「やまなし」等有名教
材を扱った時には、単元ごとにフ
ァイルを作り、資料を残しておい
たのが、役に立っている。
私が、かつて教わったように教
材研究から始める。三十年以上の
時を経て教科書に載っていること
と自体、価値のある教材と言え
る。おみつさんと大工さんの出会い
と結婚とが縁縁構造になつてい
て、読者も驚きを共有できる。最

初のページを丁寧に読み、教材研
究の楽しさを実感する。おのずと、
授業のポイントも見えてくる。感
心したことがあつた。ある事前研
究の場で
「全文をパソコンで打つてみまし
た」
というのである。音読するだけで
もかなりの時間を必要とする教材
を一字一句拾いあげたのである。
そのこと自体が、価値ある教材研
究である。早速、読み合わせをし
て打ち間違いがないかチェックす
る。細かな訂正は見られたが、ほ
ぼ正確に打ち込んでいた。
「このパソコンで打つたものを、
子どもたちのノートにしよう」と
提案した。

書き込みがしやすいように行間
を広くしたり、ノートの下の部分
を空白にし、気づいたことを書き
込んだりできるような加工でき
る。また、最初から形式段落を通
し番号を打つておくことで、授業
の中でも「何番の段落のこの言葉
から」というように全員が共通理
解しやすい。

1 授業も随所に工夫が見られた。
1 学習の足跡を示す掲示が柱の
陰に隠れないよう、どの児童から
もよく見える場所にあつた。
2 わらわりの挿絵に児童の描い
たものを活用した。不格好である
が隙間なく編み込まれたわらわ
りのイメージをどの子どもも読み
取っている。しかも左右の大きさが
違つたのである。このように子ども
の作品を生かすことも人権教育で
大切なポイントである。
3 板書が大変丁寧になされ、き
ちんと定規を使つて、めあて等示
された。私から
「指導案に板書計画を入れては」

と提案しておいた。きちんと黒板
に板書の計画を書き込み、写真に
撮つて指導案に示されてみた。
4 教師の個別指導は、児童の目
線までしやがみこみ、威圧感を与
えることなく行われていた。また、
じっくり待つて考えさせる場面も
あつた。

5 全員参加、全員集中がなされ
ていた。発言する児童の目をしつ
かり見て話を聞く姿が見られた。
一人ひとりを大切に人権教育
を具現化した授業である。どの児
童も読み書きしながら考えてい
た。挙手の仕方も指先までしっか
り伸ばし自信をもって考えを述べ
ることができていた。ペア学習も
効果的に進まっていた。もちろん、
どの段落のどの箇所から考えたの
かの根拠も示されていた。
6 物語教材を読む上で大切な
「対比する」「つなぐ」がなされ
ていた。「他のお客と大工さんの
見方考え方の対比」「おみつさん
と大工さんの目のつけどころの共
通点」がいくつも子どもたちの発
言から見えてきた。
研究会では、合わせて十か所以上
の授業の見所を述べた。ある参
観の先生が
「伊庭先生のような授業の良いと
ころを見つけているのも人権教育で
ね」と発言されたのが心に残つて
いる。

吉永先生の仰る通り「恩返しは
できないので、「ご恩送り」をして
いくという取り組みが少しできた
と実感した。
余談である。授業者はかつて私
がスポーツ少年団で指導した先生
である。小学生であつた少女が今、
教壇で堂々と公開授業を展開して
いるのが、何ものにもかえがたい
喜びである。
(社会福祉法人虹の会)

編集後記

十一月例会
(四百五十三
回)の提案は

西條陽之さん(大津市立小野小学
校)。提案主題は「見方を広げて
伝えよう『クラベル(比べる)リ
フレット』を作ろう」。四年生
での「読む・書くの複合単元の指
導」の意欲的な実践報告。▼読む
ことの過程では、説明文「アッ
とルーズで伝える」を読み①「対
比」することで見方が広がりが
力が増す②写真資料と本文を「対
応」させて述べることは分かりや
すく伝える効果が増す③分かりや
すい構成が書くときに生かせるこ
とを学ぶ。▼書くことの過程では、
「はじめ・中・終わり」の構成で
2枚の写真を対比した複数の自作
教材で確かめさせたり、既習教材
を読み直すとで学んだ①②③の視点
で読み直す等、繰り返し学びを自
覚する過程を大切にしたい。▼学級
のどの子どもが学習に見通しを持
意欲的に活動できるような強いら
という工夫であつた。▼書く直前
は、自分の構想をグループ内で発
表し合い、助言を求め時間を設
定。推敲過程として位置付けた。
▼提案終了後、英語の絵本三冊に
日本語訳をつけて発表する実習を
出席者全員で行つた。▼同じ場
面でも訳者の場面理解の違いが表
現に現れる。「同じ場面でも多様
表現手法がある」「表現の奥の、
その子なりの場面の読み取りと、
表現の必然を、個により沿つて認
め評価する」等を確認し合つた。
▼巻頭には、百崎正俊先生から玉
稿をいただきました。深謝。
(森 邦博)